

がない。私たちは銀河のレヴェルで生き、そのレヴェルでのなにかに情熱をふりむけることができない。宇宙は、私たちの意味圏の外にある。それゆえ、宇宙のなかに私たち人類の生存の意味を見出すことはできない。しかしだから、私たちのしていること、私たちの生存がこの宇宙において無意味になるというのではない。意味の成り立つところでは、意味について語るができないだけである。

この種の無意味にどのような態度をとればいいか。意味は、私たちがそれぞれにそのために生きるものへの真剣な関心から生まる。そうしたものにその関係を頂点とする意味の連鎖の内部で私たちは生きる。その外側の意味の真空域、意味の成り立たないところに立って、そこから、あるいはそこでの私たちの人生の意味を、あるいは意味の総体の意味を問うのは、矛盾している。この宇宙において私たちの生存にどんな意味があるのかと問うのは、私たちが理由なき情熱を傾けることの理由はなにか、関係の糸の行き着く先のその先になにかあるかと問うに等しい。私たちが懸命に取り組んでいるものからふと目をそらしてこれを外側から眺めるとき、「たかがこんなものにどんな意味があるのか」と思う。しかし、そのとき私たちは、意味を問えない場所に立っていることに気づいていない。この無意味にアイロニーを以て対するのは、相応しくない。この無意味の真空に身を置き続けることもできない。無意味は意味の欠如であった。私たちは、花は紅、柳は緑の意味に満ちた世界に戻るほかはないのである。

(1) A・カミュ『シーシュポスの神話』、清水徹訳、新潮文庫、一九八六年

(2) Thomas Nagel, "Absurd", *The Meaning of Life*, E. D. Klemke, ed. Oxford University Press, 1981 pp. 151-161.

たとえアリたちが反省したところで、また私たちがアリたちに代わって考えても、次世代を、ひいては種を存続させるのはなんのためかとは問うことができない。彼らの情熱はそこに向かい、情熱の向かうその先がない。

私たちは、種の存続のために情熱を傾けることはない。もつと高邁で崇高な理想に生きると胸を張る。しかし、アリの行動を眺めるときのように、私たちが高いビルから下の雑踏を眺めると、道行くひとびとがアリのように見える。宇宙の果てからこの地球を見ると想像しよう。そのように人類社会を外側から眺めると、高遠な理想のためであろうとなかろうと、人類のしていることすべての意味の連鎖のその外縁が見えてくる。私たちは百年後の環境、孫子の世代の世界のエネルギー問題を考えることがあっても、百万年後を考えて生きていないし、それを考えて生きることはできない。百万年後の地球の、あるいは宇宙に住むひとびとのためにタイムカプセルを埋めるとしても、それが百万年後のひとびとにどういう意味をもつか想像しようがない。今私たちがしていることが百万年後に意味をもつかと言え、もたない。正確に言えば、もつとももたぬとも言うことが出来ない。だから私たちの今していることが無意味になると言うのではない。百万年後に今していることが意味をもつためには、百万年後のなかに私たちが深い関心を寄せながら今まきに行きしていなくてはならないが、そのようなことは考えつかない。

意味のネットワークの内部で、関係の糸が切れているの見るときに、無意味を発見する。典型的な場合としては、行為がその目指す目的に相応しくないことに気づいたときである。これは、世界のなかでの無意味である。もうひとつ、無意味の源泉がある。私たちの意味づけるものは時間的・空間的な限界がある。蜘蛛の巣状の関係のその連鎖の外側は、

意味の真空である。そこは意味も無意味もない領域として、意味の空白である。意味について語ることができないという意味での無意味である。同じく無意味と言っても、性質が異なる。関係の糸が切れているのと、関係の糸そのものが初めから届いていないのとの違いである。

一身上の理由で深刻に悩んでいるひとが、その悩みの種を百万年後の世界から眺めるときにその悩みが消散するように思えるのは、その観点からは悩みの対象が無意味なものに転化するためではない。意味の連鎖の空白域に身を置くとき、彼を悩ませていたその意味が、意味の真空のなかで宙に浮いてしまうからである。彼が、再び世俗の意味の連鎖のなかに入っていけば、それは彼を再び苦しめることになる。

巢の内外でのアリたちの行動は、アリたちには有意味であっても、その外側にいる私たちには無意味である。そのアリたちにとって私たち人間の生存は、意味があつたりなかつたりしない。私たちの生存は、アリの生存の意味圏の外にある。同様に、宇宙全体の規模では、私たち人間の生存は意味を成さない。と言うよりも、銀河的規模では、私の、あるいは私たち人間の生存の意味について語りようがない。数十億光年彼方のふたつの銀河の衝突は、私たちの行動を変えさせる理由をもたない。なるほどそれは天文学者の関心の対象となり、その仕組みの解明、そのための観測、研究の成果の発表などは、天文学者の情熱をかきたてよう。私たちもそれに好奇心を寄せないわけではない。しかし、そうした研究やそれにまつわるさまざまな行為の意味は、どこまでも、地上で生きる天文学者や私たちの生存の意味の連鎖の一環を成すものである。それゆえ、人類がそのしくみを解明したところで、私たち地球上の人類の生存の意味が銀河のレヴェルに拡大するわけではないのである。宇宙が私たちの生存に無関心であるように、私たちも宇宙の存在に関心をもちよう

て別の系列の縦糸をつくる。こうして、ひとつの行為は、理由で結ばれる網目模様の関係・ネットワークの、その最外縁部ないし中間のどこかの結節点に位置づけられる。その最も外側の端、つまり理由の連鎖の終わるところに、理由なき情熱に基づく行為が来る。食通のひとつとしての食事、どんな犠牲を払っても名誉を最も大事と思うひとつの名誉などがそこに位置づけられる。そのようにひとつの行為は、さまざまな行為、目的とのつながりのなかで、あるものは目的それ自身、あるものは他のいくつかのもののため手段として、あるいはときにその両方としていろいろな意味をもつ。

理由なき情熱に基づく行為（ゴルフをすること）ないし対象（頭痛の除去）は、それ自身の意味を問えなくても、他の行為を理由づけ、それを正当化する。つまり、ゴルフ道具を買う、ゴルフのクラブを磨く、授業料を払ってまでレッスンを受ける等の行為やゴルフの道具や装備品、ひいてはゴルフ場や従業員の仕事などを意味づける。それらの行為を適切なものと納得させる。その意味で、その種の行為はさまざまな行為や物の意味の源泉となる。したがって、この種の行為を無意味だとすると、誤解を生じさせかねない。この種の行為は、それ自身の意味を問うことができなくても、理由なき情熱を介して他の行為や事物の意味の源泉となるからして、無意味とは言い難い。そこで、この種のものを、「没意味」とでも名づけておくことにする。

無意味とは、いずれの場合も、すなわち他のものとの関係を欠くことである。アスピリンがなんの効用ももたないなら、あの不味いアスピリンを飲むこと、アスピリンを買いに行くこと、アスピリンを製造販売することその他、アスピリンにまつわる行為にはなんの意味もないことになる。「この世に無意味なものなどない」の意味は、実際そうであるか

どうかはさておき、どんなものなにか他のものに役立つという仕方に関係するということである。神様がこの世を創造することがなく、他のなものとも関係せずに孤立して存在していたなら、神様の存在は無意味であっただろう。神様は、一回キリでこの世界を創造して身を引いたのではなく、創造後も絶えずこの世、とりわけ神様を愛し神様との関係を維持したがっている人間たちとの関係を絶やさぬことで、自身の存在の意味を保ち続けている。神様を信仰するひとと信仰される神様は、愛し愛される関係の円環のなかで自身の存在の無意味さを免れるのである。私たちが自分を無意味な存在だと思ふとき、他のものと自分との関係の欠如がそこで問題視されている。自分が社会つまり他のひとにも貢献できないということが言われているのかもしれないし、あるいは無意味なものをもたないことに悩んでいるのかもしれない。あるいは、親密な人間関係の欠如、孤独に悩んでいるのかもしれない。

意味は関係である。理由なき情熱の対象となる行為は、他の行為を意味づけても、意味のネットワーク、蜘蛛の巣状の連鎖の外縁にあるため、それを意味づけるものがない。それゆえ、それ自身は意味をもたない。「没意味」と名づけたゆえんである。言いかえれば、意味の連鎖は、蜘蛛の巣同様に有限であり、内部のどこから出発してもその先には行けない果てがあり、そこから外には関係が見出せないところに行き当たる。これが、私たちにとつての最後の無意味の源泉である。

アリの自分よりも大きな餌を懸命に運んでいる。巣に持ち帰って、女王や幼虫の餌にするためだろう。女王がその餌を食べるのは産卵のためであり、巣を造り、拡張し、外敵と戦い、餌を運ぶといったアリたちの行為はどれも次の世代をつくるためである。それが、彼らの理由なき情熱の対象である。ここまで来ると、アリの世界の意味の連鎖は終わる。

いたとき、しらけるのが当然である。しかし私たちはいつまでもしらけていられない。私たちは理由なき情熱に生きることが欲している。だからやがてまた、なにかの大義に生きようとして、同じような犠牲を払うことを辞さなくなるだろう。多大な犠牲が生ずるから無意味になるのではない。犠牲をその大きさに見合った仕方の意味づけること、つまりその犠牲が無益な犠牲ではなかったこと、私たちがこぞって賛美することのできるなにかそれに関係づけることが出来ないのである。そのようなことを、人類は懲りずに繰り返しているのである。

世界は私たちの真剣な人生をせせら笑う。世界が、人生の意味を求めて真剣に生きる私たちに皮肉な結末を用意する。そのようなとき、私たちは自らの愚かさゆえの人生の無意味さ、この世界のなかで生きることの無意味を感じる。

以上ふたつも、人生ないし世界の内部の無意味である。これに対してとるべき態度にはいろいろあろうし、またあっていい。あるひとは、そうした無意味を解消しようと行動する。あるひとは、諦めてこの世の無意味を嘆く。

カミュのように、改革でも諦観でもなく、無意味さに反抗しながら生きる事が人間の品位を保たせると言う者もいる。この世界は、人間の理性では割り切れない。それは、私たちの愚かさ、人間理性の限界によるのか、それとも世界そのものが不合理にできているのか、それは定かでない。とにかく、私たちはこの世界のなかで生きる意味をこの世界のなかにか求めることができない。世界が意味を求める私たちの要求をはねつけることもあるが、はねつけられてそこから逃げ出せば、無意味も消える。カミュは、無意味から逃げ出さずにこれを凝視し、無意味なこの世界と対峙しながら、無意味であるように運命づけられた人生を反

抗的に生き抜くことが、かえって人生を無意味から救うと言う。しかし、それで人生が有意味になるわけでもないだろう。世界は私たちのためにできているわけがなく、世界のなかに私たちの生きる意味を求めることはできない。意味があるとすれば、それは、世界の在り方にかかわりなく求めることが可能でなくてはならない。

意味の源泉は関心であり、人生の意味の源泉は、私たちが他のなにかのためでなく、それ自身のために生きると言えるような仕方です。情熱を傾けることのできるほどに関心を抱くものであった。しかし、ゴルフ狂が二十四時間芝生の上でゴルフをするわけではないように、そしてそのために金を稼いだり、食事をしたり、カントリークラブの予約をするように、私たちもさまざまなことをする。

日常の私たちの行為の大部分は、それに続く行為を理由としてなされる。抽出しから財布を取り出して薬屋に向かうのは、アスピリンを買うためであり、アスピリンを買うのはそれを服用するためであり、それは、アスピリンの鎮痛効果を期待し、頭痛を取り去りたいからである。その際、なぜ薬屋に行くのか、アスピリンを買うのかに理由はある。なんのために頭痛を治したいのかに理由はない。頭痛の除去は、他のどんなことを後まわしにしても追求される究極の目的のひとつである。こうして日常の私たちの種々の行為は、理由なき情熱に駆られての行為のひとつの頂点として、その下に広義の手段目的で連なる関係の縦糸をつくり上げる。理由のある行為のその理由には、さまざまある。ゴルフをする理由があり、それが健康上のためであったり、ビジネスのためであったり、社交のためであったりするとき、ゴルフをする行為は健康の維持や向上、ビジネスの効率化などのさまざまなものと理由づけを介し

あるいは、時の経過とともに朽ち果てる。だれかが、あるいはひとびとがそのために生きてきたものが灰燼に帰すとき、そのために生きてきたそのひとの人生も無に帰す。なんのために生きてきたのかと嘆く。この種の無意味は不運による。すべては無常と知りながらも、人生を有意味に生きるにはなにかに情熱を傾けないわけにいかない。だから、一時は人生の無意味に悩みながらも、ひとびとはやがて情熱を傾けることのできる新たなものを見つけて生きていく。なにかのために生きることのできるときそのなにかが生きる意味をあたえる。

第三の無意味はより深刻である。それというのも、ひとびとの人生を有意味にするまさしくそのものが、それと知らずに無意味を生み出すからである。毎日、全世界で数万単位で子どもたちが飢えや病気で死んでいくとしても、あたかも自滅を欲しているかのように世界各地で内戦が続くとしても、核兵器が人類の生存を瀬戸際に立たせようと、環境破壊と人口爆発と食料危機が目前に迫ろうと、生活に迫られてそれに関心を向ける余裕もない。しかし、これらのことがらに強い関心を抱くひとがあるとする。彼はそこに無意味を感じないわけにいかないだろう。

同じ民族で、あるいはかつては同じ国に属したひとたちどうしが殺し合いをしている。自分たちのおじいさんの時代にあいつらによってひどい目にあつたという歴史的な怨恨がある。これまで彼らに経済的な実権を握られ、自分たちはだまされいつも不公平に扱われてきたという恨みや妬みもある。自分の肉親が、あるいは親類の者が彼らに迫害された復讐心もある。あいつらは自分たちが唯一絶対と崇拜する至上の神をなかがしろにしたという宗教的な憤りもある。彼らをいよいよさせるわけにはいかないという自尊心や競争心もある。自分たちの文化的遺産・伝統を守りたちという熱意もある。

なにか他のことのためではない、それが、あるいはそのための行為の情熱が私たちを駆り立てるとき、私たちは当然のことに行為の結果やその及ぼす影響に盲目となる。賭事に熱中するひとがやがて全財産を失つてから、その悲惨な結末に気づく。清廉な井戸堀の政治家がひとびとに惜しまれて死んだ後に、家族の貧困が待っている。同じ情熱が集団を結束させ、生きる意味をあたえる。怨恨や復讐や宗教的情熱や民族や伝統に対する誇りといったものが、そうした情熱の源泉になる。ひとびとが共通になにかを情熱の源泉とするとき、情熱は相乗的に高まる。戦争は、一方で生きる空しさをひとびとの心から一掃する。そうした理由なき情熱がひとびとに内戦の勝利のために銃を取らせ、あるいは革命に駆り立てて、血を流させる。もちろん人類愛や危機感からの情熱が別のひとびとをして平和運動や社会改革に一生を捧げるさせる。私たちはなにかをつくりだし、獲得し、維持しようと懸命になって生きる。しかし、家族のため、国家のため、民族の誇りのため、神のため、人類の平和のためといったそうした情熱が、振り返ると無意味な結末を生んでいる。高い理想と深い感激が、それに見合った悲劇と悲惨を生む。私たちの一途の熱意は、私たちの視野を狭めないわけにいかないからである。当事者は、自分たちの掲げる大義のためであれば、それほどの犠牲はものの数ではないと思っている。しかし、ほとぼりが醒めてみれば、たとえ大東亜共栄圏と国体の護持の理想が真摯なものであつたにしても、数百万の国民の命と国土の荒廃を犠牲にするほどの値打ちのあつたものであつたかどうかは、火を見るよりも明らかである。革命の成果を守るために数百万のひとびとを強制収容所に送ることの、あるいは社会主義の南下を防ぐために遠い国のジャングルに若者を兵士として送り込むことの犠牲の大きさを知るの、情熱が冷めてしばらくしてのことである。それに気づ

には、ゴルフをすること、あるいはその上達)が、これをしないでは、それを求めずにはいられなくてはならない。健康や仕事やつきあいその他の理由ではなく、ゴルフを趣味としてこれに血眼になっているひとならば、腕前の上達そのことが寝食を忘れるほどの重大な関心事である。なんのためにゴルフをし、なぜうまくならないのかと聞かれても、その理由はない。ゴルフがしたい、ゴルフをするからにはうまくない、そうしないでは生きていく甲斐がないと思う。たかがボールをたたいて穴のなかに入れるだけのことではないかと思いつつも、ゴルフのことを考えると血が騒ぐ。そうしたやみくもの熱意、情熱が彼を駆り立てる。理由なき情熱は、もちろんひとそれぞれで限りなく多種多様である。もともと理由などないのだから、情熱が彼を虜にすれば、テニスでも野球でも釣りでも、ビジネスでも学問でも名誉でもその他なんであつてもよかつたのである。ただ、彼にとつてはなぜかゴルフでなくてはいけないだけである。彼がギャンブルで身もち崩したのではない。ギャンブルへの盲目的な情熱が彼を引きずり回して、彼を破滅させたのである。なぜ復讐したいのか、復讐してどうなるのか。これに答えることができないままに、復讐心が生涯そのひとを駆り立てる。なぜその異性に夢中になり、そのひとを愛するのか。なぜそのひとでなくてはいけないのか。その理由もまったくない。理由を聞かれていろいろ答えるにしても、それらは後からの付け足しである。守銭奴が金銭に執着するとき、なぜ金を貯めるのか、貯めてどうするのか、その理由をもちあわせない。もちろん多くのひとびとに共通の関心事もある。わが子の健やかな成長は、たいいていの夫婦の強い関心事であろう。なぜわが子が丈夫に育つて欲しいのか。これにも理由などない。頭痛に悩むとき、なぜ痛みを取り去りたいのか、その理由ももちろんない。私たちは、ひとそれぞれ

れの、さまざまものに対する情熱、熱意に突き動かされて生きてる。ひとつの主たる情熱だけでひたむきに生きるひともあるが、たいいていのひとは複数のあれこれに強い愛着をもち、それらに精魂を傾ける。人生がひとつの情熱に貫かれることもあれば、そのときどきで異なる情熱のおもむくままに前後の見境なく奔放に生きるひともある。苦しんでいるひとびとを一人でも多く助けたい。そうした利他的な情熱もあるうし、どんなことをしても自分の倉に貯め込みたいという情熱もある。私たちを駆り立てる情熱を利己的と利他的に区別しても、その違いは、情熱の目指すところの相違によつてだけである。そのように、そうしないではいられない、さもないと生きていくかと思える仕方である。この自身が抜き差しならない関心事であるようなものについては、「いったいそれにどんな意味があるのか」、「なぜそれほどまでにつつを抜かすのか」と尋ねることができない。そのひとにとつての意味の源泉となるのは、そうしたことがらである。どうでもよいものに悩むことはない。私たちが悩み苦しむのも、私たちが悩みの種にひとしおの関心を抱くために他ならない。

人生の無意味を感じる第二、第三源泉は、幸いにも、たいいていのひとは通りすがりにこれを感じるだけで、運さえよければ、さして気にも留めずに生きていく。それというのも、私たちはたいいてい個人的なことから情熱を燃やし、強い関心を抱く。自分に関係しなければ、無関心でいられる。この種の無意味はたいいていのひとには無きに等しい。

手塩にかけて育ててきたわが子が一瞬の事故で死ぬ。ひとりのひとがその生涯をかけて、あるいはひとびとがいく世代もかけて営々と情熱を傾けて築きあげてきたものが自然の災害や戦争などで一瞬にして潰れる。

て行った先が、隣の町内であった。慌てて挨拶先に赴き、挨拶をして顔を上げると、自分の女房であった。壁に釘を打とうとして瓦釘を打ち、釘が隣の家に突き出ていた。マスクをしたまま唾を吐いた。眼鏡をかけたまま、顔を洗う。これらは、普通なら意味のある行為に、そそっかしさゆえにその意味を欠く際の無意味である。この種の無意味な行為を、相手の警戒心を解くために、場の緊張を和らげるために、相手の注意をひくために意図して行うこともある。相手は、無意味を理解しながら、それを演じる者の意図とあわせて、その無意味な行為の意味を察知する。

気分が減入って、あるいは身体的・精神的な疲労もあつてか、何事にも関心をよせることができなくなることがある。それまでの必死懸命の生活から解放されて、いわゆる切れた状態、燃え尽きた状態になることもある。なにもかもがどうでもいいと思える。人生を放擲したくなる。

これが、関心喪失の事態である。そのようなひとには、有意義なものなどなにもない。意味の源泉であった興味・関心をあらゆるものに対して失うことで、なにもかもがどうでもいいこと、つまらぬこと、馬鹿げたこと、無意味なことと思えてくる。自分のしてきたことだけでなく、この世のすべてのことがらが無意味に思える。ひとびとがなにかに重大な関心を寄せ、懸命に努力していること、成功して大喜びし、あるいは失敗して嘆き悲しんでいる姿が愚かしいことのように見えてくる。

しかし、なにもかもが無意味であるなら、なにもかもが無意味であるということ自身も彼らにとつて無意味となるはずである。それゆえ、この世のすべては無意味と言うことはできない。実際のところ、もしすべてがどうでもよくなるならば、朝目が覚めて起きるかどうか、起きて食事をするかどうか、その前に着替えをするかどうかもどうでもよいこととなり、重度の鬱状態同様に、もはや生きることすらできなくなる。あ

らゆることに無関心であるなら、あらゆることに無関心であることそれ自身、すべてに関心をもちたくない自分の在り方にも、無関心でいなければならぬ。だが、すべては無意味と言いながら、彼らは内心では意味を見捨てていない。彼らは、情熱を傾けるに値すると思えるものを未だ見つけられずにいるのかもしれない。それなくしては生きられないと思つていたものが得られずに絶望していたり、空しい努力の末に疲れ果てているのかもしれない。あるいは情熱を傾けてきた目標に到達した結果、次なる目標が見当たらずに途方に暮れているのかもしれない。あるいは、彼が等しく大きな情熱を傾けるものが二つながら手に入れられないこの世の有様に抗議しているのかもしれない。すべては無意味だというのも、そう言う彼らにとつてのことであり、他のひとには有意義なことが人生にいっぱいある。

このような仕方て人生を無意味だと感じる機会は、一時的にであれば、そして程度の多少はあつても、たいていのひとにある。しかしそれは、軽いはしかのようなもので、ひとびとはそのうち新たな強い関心を自らの内に目覚めさせて、それに向かつて生きていく。情熱を注ぎ込むだけの値打ちのあるものと、ひとびとがそれぞれ思えるようなものささえあればいい。それが人生の無意味さからひとびとを救う。

なんであつてもよい。ゴルフの上達に夢中になっているひとがいるとする。彼はゴルフ狂である。あるいは将来の出世に、あるいは同業者とのつき合いや接待その他の仕事上の理由でゴルフの腕を磨いているのかもしれない。健康によいという理由でゴルフを始めたのかもしれない。その他ひとそれぞれにさまざまな動機があろうが、ゴルフに限らず、なにかをする動機には、そのようになにか他のためではなく、極端な場合には寝食を忘れるほどにそのこと自身に情熱を傾け、それ（目下の場合

ちろんオオカミが野の花を無意味なものとみなすわけではない。野草に  
関心をもたず、それゆえその名すら知らない雑草の前を私がただただ無  
関心に通り過ぎるように、一瞥さえせずに通り過ぎるだけであり、彼に  
とって野の花は、あつて無きがごとしである。同様に、野の花ではなく  
その美しさは、ハチやチョウには無きに等しい。そこにひそむ蜜だけが  
関心の対象である。オオカミの重大な関心は、今日の餌としての赤ずき  
んである。その赤ずきんも、おばあさんにとっては、かわいい孫の意味  
をもつ。

あるものの意味とは、そのものに対してある者が抱く関心が創り出す  
ところの、両者の間の関係のことであるなら、同じものがさまざまな者  
にとつて異なる意味をもつことになる。同じ花Xも、それに対する関心  
に応じて、ハチやチョウには食料の在りか、赤ずきんにとっては病気の  
おばあさんへのお見舞いのプレゼント、花屋にとっては商品といったよ  
うに、異なる意味をもつ。そのように、ひとつのものがさまざまな者に  
とつて異なる意味をもつことを知っているのは、私たち人間だけである。  
私たちは、そのものが自分にとつてもつ意味だけでなく、他の者にとつ  
てもつ意味をも理解する。

先史時代に人類の住んだ痕跡のある洞窟に刻まれた文字らしき模様や  
その解説は、考古学者にとつては重大な関心事であるが、それがどこか  
遠い外国の洞穴のことであれば、私たち素人にはどうでもいいこと、無  
意味なこと、あつてもたいした意味をもたぬことである。大掃除の際に  
押入の隅から見つけた古新聞の地方版の小さな記事は、読めばその意味  
はわかるが、痴呆老人が横断歩道ではないところを歩いていくるまに  
はねられて死亡したというその内容は、身内やドライバー、あるいは村  
内での死亡事故ゼロ運動の旗振りをしていた役場の関係者には重大なも

のであつただろうが、大掃除に忙しい今の私にとってはなんの意味もな  
い。

意味についての以上のところから、私たちが世界のなかで人生の無意  
味を感じるとき、その四つの源泉のうちの三つを引き出すことがで  
きる。

意味は、なにかに対する私たちの関心から生まれる。私たちが自分の  
人生のなかで重要視、重大視するものがあれば、生きる意味、人生の意  
味がそこから生ずる。私たちが、日々の生活、ひいては人生において善  
くも悪くもそれは重大だとみなすものが、私たちに生きる意味をあたえ  
る。ひとそれぞれであるにしても、私たちはたいいくつかのなにか、  
仕事や出世、自分の容姿や評判や名声、異性や性生活や趣味、家族の健  
康や子どもの養育、収入や消費その他に狂おしいほどの関心・熱意をよ  
せて生きている。食道楽のひとは、うまいものを食うために苦勞を厭わ  
ず、苦勞を苦勞と思わない。服装に関心をもつひとは、流行に遅れまい  
と、血眼になつて最新の衣装を調達する。異性に、あるいは出世、ある  
いはマイホームの建設に一途の関心を寄せるひとは、そのために全精力  
を注ぎ込む。そうした関心に突き動かされてその関心に沿つて生きるこ  
とができるとき、私たちは、人生に充実感を覚え、生きがい、生きてい  
る実感を感じる。少なくとも、人生が無意味だなどとは思つてもみない。

無意味とは、意味の欠如である。先ず意味があり、その欠如として無  
意味が生ずる。意味があると予想されるところに、あるいはかつては意  
味があつたところに、意味があつてしかるべきところに、その意味が見  
出されないところに無意味が出現する。引越しの挨拶をしようと訪ね



めなく移る。彼らもまた無意味なことをしていると自覚はもちろんない。むしろ自分たちのしていることがいかに大切で意味あることであるかを確信している。だが、その夫婦の喜びと悲しみ、野心と失意の人生も、遺跡のかまど跡のどこにも印されていない。

物ならば、私たちがそれと認める以前にもそのようなものとして存在していただろう。発掘された化石は、人類誕生に先立つ数千万年以前に、そのような骨格の生き物がいたことを証拠だてる。これに対し、意味はもちろん物ではない。意味は、私たちとともに生まれ、私たちとともに消滅する。意味は、なにかを意味づける私たちあつての意味である。岩に刻まれた文字らしき模様も、それを彫りつけた大昔のひとには意味があつたのだろうか、これを解読できない私たちには、無意味な模様にすぎない。英語を解さないひとには英語の文章が無意味な代物であるように、意味は、そこに意味を見出し、それを有意義とする私たちと相即の関係にある。

言葉の意味については論旨を複雑にすることを避けるため別に論ずるとして、あるものの意味は、それを意味づける者あつての意味である。あるものの意味とは、そのものとそれを意味づける者との関係である。「それは（私に）どんな意味があるのか」と聞かれれば、そのものがそのひとにとってどのような点で重大な関わりを有するかを説明しよう。あらゆる点で私にはなんの関係もない、それに関わることがないとき、それは私には無意味である。花の蜜は、ハチやチョウにとって食料の意味をもつ。彼らはそれに無関心ではいられない。しかし、花のなかにある同じ微量の蜜は、養蜂家や果樹園芸家を別にすれば、私たち人間にはなんの意味もない。花は、私たちがその美しさを愛でる対象として意

味をもつ。だから赤ずきんにとっては、野の花は病気で寝ているおばあさんへのプレゼントの意味をもつ。そのようなものとして花に関心もたれる。花屋にとっては、花の美しさはさほどの問題ではない。売れ筋の花であるどうかという意味、利潤を生む商品の意味をもつ。ハチやチョウにとっては、花はそのような意味をもたず、むしろ食料の在りかを知らせるたんなる標識としての意味をもつにすぎない。つまり彼らは、標識としてだけ花に関心をもつ。花は、彼らにとっては、美しいものでも美しくないものでもなく、その美しさは彼らの関心の外にある。オオカミのような肉食動物にとっては、花や蜜の存在そのものがなんの意味もない。言いかえれば、あるものXが、それぞれの関心に応じて、赤ずきんにはプレゼントの花、花屋には商品、ハチやチョウには食料の目印として知覚される。その際の、Xと赤ずきん、花屋、ハチやチョウとの間のそれぞれの関係が、Xの意味である。Xのもつ意味は、他のなにかがXに対してのもつ関係であるから、そのなにかにとっての意味である。この関係、すなわちXの意味は、赤ずきんと花屋とハチやチョウのそれぞれにとっての意味として、それぞれの関心に応じて異なる。

あるものの意味とは、そのものとそのものを意味づける者との関係のことであつたが、その関係をつくり出すのは、意味づける者が意味づけられるそのものに対してのもつ関心である。私たちが重大な関心をよせないわけにいかないものが私たちにあって重大な意味をもつものである。さまざまな観点から関心をよせようと思えば私たちの関心呼び起こすことのできるものが多様な意味をもつもののである。それに関心をもちつづけるなら、それに対していよいよ関心が深まっていくものが意味深いものである。意味の源泉は関心である。オオカミは、野の花にまったく関心をもたない。花は、彼にとって無意味な存在である。も

か。私たちの日常生活の時間的な枠組みは週や月、せいぜい数年の単位で出来ていよう。人生は長くて百年であろう。私たちの生活の空間的な枠組みも地球圏の域を出ない。ごく限られた時間・空間での枠組みのなかで起こるこうした種々の出来事に私たちは一喜一憂しながら生活しているのだが、そうしたことがらも、地質学的な数百万年や数千万年、あるいは宇宙生成以降の数十億、百数十億年の枠組みのなかでは、ほとんど意味を失い、まったく取るに足らないものとなるように見える。人類誕生以降の百万年の時の流れも、宇宙生成このかたの百数十億年の時間経過からすれば微々たるものであり、長寿の百年の人生は、その人類史の一万分の一、つまりほんの一瞬の出来事である。古来ひとびとが嘆き続けてきたように、人生は朝露のごとくはかなく、私たちは生まれた次の瞬間にもう死んでいる。環境破壊によって地球上の人類が絶滅し宇宙船地球号が解体することがあったところで、あるいは太陽が五十億年後に爆発し膨張して残骸が中性子星となり、太陽系そのものが消滅することがあったところで、そうしたことも、太陽系の属する天の川宇宙の時間的・空間的な座標軸では、まったくの些事であるだろう。

永遠の相のもとではほとんどの出来事が些末なことになるようにみえるとき、このことは精神衛生上の効用をもつこともある。銀河系宇宙外の、数億光年彼方から来る島宇宙や星団の光を見つめるとき、個人的にはいかに深刻で胸をはり裂くほどの悩み苦しみといえども、そうした一身上の理由などこの宇宙ではまったく取るに足らないものに思えてくる。悩むべき理由はもはやなにもないように見える。そうした些事で悩むことと自身が無意味なことのように思えてくれば、身を引き裂くほどの悩みでも、一時は消散しよう。私たちは無意味なことに悩むことはできないのである。

この種の無意味も私たちの熟知するところであり、あの「荒城の月」の詞の魅力のいくばくかも、これに類似のものを私たちに感じ取らせるところにある。春、満月の明かりのなかに満開の桜がおぼろに霞むなか、城の大広間での宴はたけなわをむかえる。昨年の隣国との戦に大勝利をおさめてこれを併合し、今や一地方の覇者となった城主は、杯を置いて式服に威儀を正した家来一同を昂然と見回す。彼は今や一族の長久の繁栄を確信する。一所懸命の勲功によって領地を増された武将たちは、声を荒げて互いに自分の手柄を尾緒をつけて吹聴しあい、次なる戦への意気込みを声高に語る。酌をして回るきらびやかに着飾った女たちの嬌声は喧噪をさらに助長し、舞の歌曲もかき消される。居合わせたひとびとの誰もが、自分たちの行為を無意味なことなどは露とも感じなかっただろう。しかしこれも歴史の束の間の一コマ。今となつては、すべては夢と幻に化し、往時の栄華と強者どもの見果てぬ夢を偲ばせるのは、松の枝葉を通して城の石垣を照らしたあの時と同じ月だけである。あの折りの城中のあのひとたちの想いや夢は、そして彼らのしていたこと、したがって現在の私たちがしていることの意味はどこにあるのだろうか。

弥生時代の住居跡が発掘される。中央に炉が掘られ、穀物を貯蔵するための土器や食器の破片がみつかる。おそらく、現代の団地の一区画と同様に、若い夫婦のささやかな夢や野心がそこにあつたことだろう。夫は、今年の上首尾の狩りの成果に喜び、たき木をくべながら、自分たちと子孫のためのこれからの開墾の計画とそこからの収穫の夢を妻に聞かせる。一月前に生まれた子供に乳を含ませながら、若い妻は、その子の将来についてあれこれ語る。話題はやがて近隣のうわさ話や去年の嵐の恐ろしさ、この頃の天候不順、先頃呼ばれた隣村での婚禮へと、とりと

## 人生の無意味について

安西和博

発見される無意味には、大きく分けて二つの場合がある。ひとつは、私たちが毎日の生活で出会うさまざまな出来事に無意味を見出す場合である。これは、いわば世界のなかでの無意味である。他方は、そうした無意味な、あるいは逆に有意義なさまざまな出来事から成る私たちの人生全体、この世界をときに眺めるときに私たちが感じとる無意味である。これは、いわば人生全体、世界そのものの無意味である。

紛争がいつ果てるともなく家族間や民族間、国家間で何十年、何百年と続けられる。復讐が報復をよび、これがまた相手方の復讐心を煽るといふ仕方で癒しがたい憎しみを双方に増幅しあい、屍だけが累々と積み重なり、争いの決着する見通しがたない。無意味の極みと言うべきである。発展途上国では、乳幼児が栄養失調や伝染病で毎日数万人単位で死んでいく。神様や運命を持ち出しても、それらの子どもが生まれてきた理由、死んでいくわけを説明することはできず、やり場のない憤りや嘆きだけが残る。ひとびとが幾世代もかけて営々と築き上げてきた都市やその文化が、火山の爆発や地震でことごとく灰燼に帰す。希有の天与の才の片鱗を見せはじめたばかりの若者が、不慮の事故で死ぬ。彼の前途を想えば、その死を納得させる理由をみつけない。趣味・道楽もなく、生活を切り詰めてただただ安楽な老後の生活に備えて貯え

をし、いよいよ働きづめの生活に見切りをつけて楽隠居を決め込んだ矢先に、病死する。それはいったいなんのための人生だったのか。

こうした空しく悲しい出来事がこの世界で次々と無数に起こる。これらの一端であるが、この世はしかし、こうしたことばかりで無意味でいていけない。努力が報われ、善意が感謝の念をもって評価され、才能が余すところなく開花し、仕事が所期の成果をあげることも多々ある。この世の出来事、この世界が総じて無意味だとも言えない。無意味なこともあるが、有意義なこともこれに劣らずある。その割合は、この世界がたまたまどのように出来ているか、そして私たちがどの程度賢くあるかで決まるだろう。この世界が、今よりもっと馬鹿げた仕方出来ていることもあり得たであろうし、あるいはもっと合理的で、無意味なことの少ない世界でもあり得たであろう。世界や人生が無意味であるかどうかは程度問題であり、そこにはなんの必然性もない。

もう一方の、私たちが対照させる無意味は、これとひきかえに必然的な無意味である。それは、上掲の意味・無意味の区別の外側にある。この世の有意義ないし無意味な出来事を、それらが有意義ないし無意味となる限られた空間・時間内の脈絡ないし枠組みから外して、より大きな枠組みにそれらに移すときに、この種の無意味が発生する。私たちの人生全体を左右し、私たちが狂おしいほどに重大視することも、私たちの死後の百年後にどれほどの意味をもち続けることができるのだろうか。私たちが、あるいは私たちの愛するひとが幸福に生きることが、十万年後にどれほどの意味をもつのか。核戦争による人類ないし地球上の生命の絶滅といった人類全体の運命を揺るがすほどの重大事であっても、それが数百万年、百億年後にどれほどの意味、重大さを保っていられるの